

越中 立山 大鳥 崩れ

安政五年
大地震大洪水の古絵図集成



立山カルデラ砂防博物館

越中立山大鳶崩れ

1. 安政の飛越大地震

深夜にわかに家々がみしみし音を立てて大揺れに揺れ、眠りを覚ました人々はよろめく足を踏みしめて戸外に逃れた。土蔵は大音響を発して崩れ落ち、瓦がバラバラと落ちてきた。(当時、民家は板葺きが多かったが、土蔵はおおむね瓦葺きであった)。道は各所でずたずたに裂け、激しく水を噴きだした。特に諏訪川原の液状化現象は猛烈であった。富山城の石垣は崩れ、樹木は濠へ倒れ落ちた。空は、大地震特有の異常現象を呈して火事のように赤く、人々の叫び騒ぐ音と相まって不気味であった。安政五年(1858)2月26日〔現行暦4月9日〕未明、富山城下町を襲った大地震であった。《図1・2》

この地震は飛驒(岐阜県)・越中を中心として猛烈をきわめ、被害は加賀(石川県)、越前(福井県)にも及んだ。跡津川断層の活動によるもので、推定マグニチュード6.8とも7.1ともいう。

安政年間(1854~1860)には、10数回も大地震が日本各地を襲い、安政2年の江戸大地震では、徳川齊昭の片腕で尊皇攘夷論者であった藤田東湖が圧死した。これら一連の天災が黒船来航で騒然たる幕末日本をいやが上にも揺さぶった。飛越地震もその一つであった。

2. 神通川の災害

この地震のとき、神通川はたちまち水が退き、歩いて渡れるほど減水したが、深夜になってにわかに大增水し、激しい泥水の高波が打ち寄せ、日本一の規模を誇った頑丈な舟橋も、まず南側でクサリが切れ、つづいて北側のクサリも切れて、濁浪にもまれながら押し流された。西道(富山藩領)も東道(加賀藩領)も至る所で山崩れの土砂で埋まり、飛驒・越中間の交通は途絶した。3月10日から6月下旬までに6回の出水があり、6月末の洪水は特に激しかったという。

3. 庄川・小矢部川・高岡その他の災害

庄川奥でも大牧村などで山崩れが起こり、土砂が川まで突き出した。小矢部川奥では、臼中山などが崩れ、川をせきとめた。下流23か村の村人が総出の

徹夜作業で土砂を切り崩し、排水に成功、大災害には至らなかったという。

高岡でも川原町を中心に激しい液状化現象が起こり、多数の民家が破損し、古城の石垣や樹木も濠に崩れ落ち、御旅屋通りから下関まで大地が大きく裂け、その裂け目は半年も塞がらなかったという。新川平野も射水平野もいたるところで液状化現象を起こした。噴出で水浸しになった伏木などでは津波到来のデマがとび、人々はパニック状態に陥った。南砺波の大寺院城端の善徳寺・井波の瑞泉寺なども破損した。

4. 立山大鳶崩れ

しかし、最大の災害は常願寺川の奥山、すなわち立山カルデラの大崩壊とその泥洪水であった。立山奥がしきりに鳴動し、もうもうたる黒煙の立ち上るありさまは、富山城下町からもハッキリ見えたという。(富山藩士 野村宮内の『地震見聞録』には、粗略な図であるが、立山から噴煙の上るスケッチが載っている。)《図2のF》

異変に驚愕した地元役人(十村役など)は、直ちに実地踏査しようとしたが、川は泥世界と化し、川沿いの道は山崩れで寸断され、とうてい通行できぬ状態であった。岩峯寺では屈強の男12人を選び、対岸から迂回して登らせ、山上から状況を検分させたが、5人は落伍し、7人がかろうじて登頂し、立山カルデラ一帯の惨状を目撃し、急ぎ報告した。報告は加賀藩へ急報された。

芦峯寺からは、8人の男が裏山を迂回して称名滝上流にたどり着き、谷川を越え、弥陀ヶ原の一端に取り着き、松尾峠まで登って立山カルデラの惨状を眼下に確認した。その報告も直ちに加賀藩へ通報された。その他各所からの情報は櫛の歯を引いたように藩に殺到した。

大鳶・小鳶両山(立山山脈から西へ派出した支脈上の山で、立山温泉の南にあった)は、大半崩落して、温泉場一帯は数十丈の土砂岩石に埋没していた。温泉場で働いていた工事人夫など30余人は一瞬に埋没死した。(その供養碑は後年、大山町本宮念法寺の境内に建てられた。)

立山温泉対岸、湯川北側の松尾水谷も、湯川・真

川合流点近くの鬼ヶ城・熊倒れなどの峻しい山々も崩れ落ちて湯川谷・真川谷をせきとめ、いくつもの天然ダムが満々と泥水を湛えていた。山々はなおも不気味に鳴動し、刈込池付近からは猛煙を噴き上げていた。(これが富山城下からも望見された噴煙である。) 刈込池の東隣にあった孫池〈孫刈込池〉はもと冷水池であったが、この地震によってにわか熱湯に変じ、「新湯」「新湯地獄」「新地獄」などと呼ばれるに至った。猛煙を噴き上げていたのはこの孫池であった。

(この熱湯異変については、明治11年(1878)アーネスト・サトウの日記、明治26年(1893)ウォルター・ウエストンの紀行にも特筆された)。

報告は息つくまもなく、富山藩にももたらされた。山中の巨大な泥水溜まりがドッと押し出してきたら、富山平野は泥海になるぞと人々は騒ぎ、家財道具をとりまとめ、家族をひきつれて^{くれは}呉羽丘陵周辺の高台に避難し、10代富山藩主だった前田利保も避難し、富山一円はパニック状態に陥った。

5. 山突浪・泥洪水

地震から半月後の3月10日(現行暦4月23日)朝、常願寺川奥山が鳴り出し、おおい強く鳴動したので、人々が驚いているうちに午前10時ごろ、かなりの余震、続いて大振動して鳴動が近づき、黒い小山のようなものが川いっぱい押し出してきた。山崩れの土砂がおびただしい流木を押し出してきたのだ。流木はおろか立木のままの森林までごっそり押し流されてきたという。大音響は何十里までも聞こえ、大地は何里もの間大振動したという。

この泥洪水、通常の洪水と違って土5分・木2分・雪1分・水2分といわれ、それらが混ざり合った堅い粥のような大泥流で、激しく流下してくる岩と岩とがぶつかり合って火花を発し、水勢は川の両側をもみつぶし、^{しゅくほう}ごうごうと流域平野を呑み尽くした。

岩嶺寺の^{しゅくほう}宿坊24坊のうち川近くに坊を構えていた9坊はたちまち泥流に呑み込まれて流失。^{たちおごんげん}刀尾権現社の神殿は30間ばかりも上方へはね上げられた。社頭に据えてあった鉄の大釜一对のうち、雌釜は押し流されて川に転落、雌釜は川底から泣き叫び、雄釜は雌釜を呼んで叫び、両釜の呼びかわす声は濁流の

大音響に混じって凄絶であったと伝えられている。(雄釜は岩嶺雄山神社の境内に現存)。

常願寺川から取水していた21の用水はことごとく泥土で埋まった。7万8000石以上の田地が用をなさなくなった。これでは藩の経済が破綻する。藩では急ぎ人足をかり集めて、用水掘り上げ作業を突貫工事で進めたが、1カ月半後の4月26日(現行暦6月7日)またもや奥山鳴動して2回目の泥突浪がドッと押し寄せ、ために用水工事中の人夫たちは逃げ出す余裕もなく、大部分埋没死を遂げた。とくに広田用水では60~70人も犠牲になったという。この2番水は、1番水より2丈余高かったという。前後2回の泥突浪、泥洪水で新川平野は泥海と化し、泥地獄を現出した。第1回は主として、真川谷の泥水溜まりが崩壊氾濫し、常願寺川東側に惨状をもたらしたが、第2回は主として湯川谷の泥水溜まりが崩壊氾濫し、常願寺川西側に猛威を振るった。とくに新庄一帯は被害大で、新庄新町の130余戸は全戸深い泥に埋没したという。

2回の泥洪水で押し出してきた小山のような大岩石は各地に残り、今も西大森(常願寺川東岸、立山町)、西ノ番・^{ながれすき}流杉(常願寺川西岸、富山市)などにその巨大な残骸をとどめている。

常願寺川下流の水橋一帯も濁流に襲われ、数十軒がこれに呑み込まれたという。河口付近は泥・流木・家財道具などが折り重なって大渦を巻き、打ち寄せる海の波浪とぶつかりあい、凄絶な光景を呈した。脅えきった人々の目には、その泥渦の間に種々の怪奇現象が目撃されたという。怪異現象の一つとして西水橋町役人からの報告書その他に記載されているのは、川上から4~5間(7~9m)ばかりもある鯨のようなものが流れてきて、逆巻く水を掻き立てて出沒し、それが川下へ流れていった後、渦巻きの中から巨大なロウソクのような青く光る火がボカリボカリと二三度立ち上がったという。また、河童(かっぱ)のような怪物の群が現れて人を食ったというウワサが高岡の『瑞龍寺文書』などに記されている。水橋の定渡し場は泥に埋没し、泥の深いところは、腰を没するほどで、足を立てる場所もなく、人馬の交通すべて不可能に陥った。

流域の村々は土砂に埋め尽くされ、用水江口もすべて泥に埋まり、何よりも飲料水に窮した。人々は泥入りの家を捨て、村を捨てて山の手に住居した。

6. 富山城下といたち川

大災害に蹂躪された中で、一つ心強かったのは馬瀬口（常願寺川西岸、現 大山町）であった。泥津波の瀬先はいち早く馬瀬口に突きかかったが、この地の堤防普請が丈夫にできていたので、しっかり持ちこたえた。もし、この普請が切れたら、富山城も城下町も残らず泥で埋まったに違いないが、これが防災堤の威力を発揮したのだ。伝説では、佐々成政が常願寺川の治水に心を砕いたといわれるが、富山藩もこの地点をカナメとしてかねがね、殿様林を造成するなど治水工事に営々努めていたのであった。

城下町の中心部は災害を免れたが、いたち川・赤江川には泥水が激しく落ち込み、いたち川から東の柳町・稲荷町一帯は泥洪水の惨害を蒙った。雪見橋をはじめ、いたち川の橋はことごとく流失した。

7. 災害に関する数字

被害に関する数字は資料によって相違し、同一資料でさえ前後一致せぬものがあるが、加賀藩十村役であった杉木弥八郎（石割村〈現富山市〉在住）の記述によると、

（加賀藩領）

〈3月10日の泥洪水のため、常願寺川東側流域〉

耕地壊滅不毛となった石高	5,236石余
被害町村	66カ所
流失・潰倒家屋	250余戸
土蔵・納屋	78棟
溺死者	5人

〈4月26日の泥洪水のため、常願寺川西側流域〉

耕地壊滅不毛となった石高	20,560石余
被害町村	74カ所
流失・潰倒家屋	1,360余戸
土蔵・納屋	808棟
溺死者	135人
被災者	7,350人

以上、これらの被災窮民を収容するため、加賀藩が秋吉（現 富山市）など15カ所に設置した小屋98棟。（富山藩領）

耕地壊滅不毛となった石高	7,380余石
被害村落	18カ所

その他の被災に関する数字は不明。

加賀藩では、家を失った難民250余戸を川の東側の

高原野（現立山町）に移住させることを議決し、これに易地（かえち）7,000石（段別1,335町余）を与えた。《図43.44》

8. 黒部奥山の山抜け

飛越大地震の余震（7月22日か）のため、黒部奥山でも山崩れが起こった。8月1日、岩峯寺目代から立山裏の黒部川奥入に大きな水溜まりが見えると新堀村（現 富山市）の十村役朽木兵三郎へ急報してきた。驚いて山廻りの者を登山させ調査したところ、地藏岳（現 針ノ木岳）の斜面が300間四方崩れ落ち、その岩石土砂のため横幅100間、長さ20丁にわたって濁水が溜まっているのが確認された。しかし、堆積した岩石の間から少しずつ水が漏れているので、大災害の心配はないとの報告であった。ほぼ現在の黒部第四ダムのあたりにダム湖のようなものが出現したのだ。常願寺川奥大鷹崩れの直後であったから、関係者は憂慮し心を痛めたが、幸い災害には至らなかった。《図45》

9. 常願寺川とその防災

常願寺川は従来も幾たびか氾濫して周辺に災害をもたらした。伝承によれば、西番・中番・下番などの地名は、氾濫の番（監視）をする場所の意であるという。また、西番（富山市）の正源寺は、常願寺川の荒びを鎮めるための祈祷所として、天正2年（1574）馬瀬口の五十嵐次郎左衛門が西番・下番地方の村民一同と語り、富山光厳寺10世・蝮川最勝寺9世の大用恵撮和尚を開山として創建した寺であるという。馬瀬口（大山町）という地名は本来、真瀬口の意で、これに馬の字を宛てたものらしいが、人々はこれを魔瀬口と、いわゆる民間語源解釈（フォルクス・エチモロギ）でうけとり、恐れていたという。富山藩では、この魔の場所にいわゆる殿様林を造成するなどして災害に備えていた。加賀藩では、天保7年（1836）かなりの規模の治水工事を実施した。（その工事絵図も残っている《図47》）。

安政5年、予測をはるかに超えた大鷹崩れの大災害に驚愕した加賀藩は、いそぎ大普請計画を建て、万延元年（1860）大々的に工事を押し進めた。《図48》

万延元年といえ、勝海舟らが咸臨丸かんりんまるに乗り組み、日の丸の旗をひるがえし日本最初の遣米使節として、太平洋を押し渡った年であった。開国したものの攘夷の論はお激しく、世情騒然として、海防にも尽くさねばならなかった。前々年、立山頂上峰本社が奇怪な出来事で破損し、新社殿を建造遷宮して民心を鎮めねばならなかった。藩の財政は苦しく、多事多難の中で、常願寺川普請に努めたのであった。

この治水事業は、幕府崩壊し、金沢藩（加賀藩）・富山藩の消失した後も、県政の最重点事業として継続された。明治16年（1883）富山県が石川県から分離独立したのも、常願寺川はじめ暴れ川の多い越中側では、治水のための多額予算を要求し、加賀・能登側と利害得失相反したことが最大の理由であったといわれる。かくて明治24年（1891）には、オランダからの、いわゆるお傭い外国人ヨハネス・デレーケを招いて指導を仰いだ。デレーケが「これは川ではない、滝だ」と驚嘆したというエピソードはあまりにも有名だ。このデレーケの建言助言に基づいて近代的治水工事が進められ、現在に至っている。その発端が、安政の大鷲崩れであった。

10. 災害の絵図・記録など

安政5年の大地震には、神通川も小矢部川も相当被害を生じたが、これに関する絵図は見当たらない。作成されたかどうか不明である。その他の川では、黒部川奥で余震による山崩れと大水溜まりを生じた絵図が1点見つかっているだけである。《図45》これに対して、常願寺川奥山と流域の災害図は、大小精粗さまざま作製され、実におびただしい数に上った。原図から転写された図も幾組も残っていて、いかに当事者がこの災害を重視していたかが見える。「大鷲崩れ」の名は大きな恐怖心を伴って、越中の人々の間に言い継ぎ語り継がれた。

富山藩士の書き留めた『地震見聞録』『地水見聞録』十村役などの報告をまとめた『立山変事録』『地震山突波泥洪水記』など、一冊にまとめたもののほか、各種文書記録類に断片的に書きとどめられた災害の報告・見聞は枚挙にいとまがない。また、『飛驒・越中地震山抜泥水化物口説（ばけものくどき）』の如く、長編の謡い物まで行われた。

富山藩お抱え絵師木村立嶽きむらりゆうがくは、数葉の災害スケッチを残したが、その一葉には神通川が高波となって押し寄せ、岸の大地は裂けて水を噴き出す光景が描かれている。《図1のC》

震水災後、荒廃した村から村民を立ち退かせ、高原野（現 立山町）に田畑を与えて移住させたおりの詳細な絵図、万延元年の長大な普請絵図（石黒信由の子孫らが作製したと思われる精密な正確な測量図）など災害の後始末の図なども幾つも残されている。《図43・44・48》

これらの絵図を集成し、あらためて安政の大災害を身近にひしひしと実感し、多くの犠牲者の方々を追悼するとともに、郷土の防災に深く思いを致すのである。

最後に小又幸井の短歌一首

立山に鎮まる神の猛くして常願寺川を
御手洗みたらしにせり

常願寺川は、まさに立山神の荒御魂（あらみたま）である。カルデラはその荒御魂の宿るところである。

（小又幸井は、歌人で富山県出納長も勤めた行政家、かつ歌人川田順の立山登山に付き添った登山家でもあった。順は、『歌集 鷲』によって芸術院賞を受賞した大歌人で、この歌集は立山での作54首（昭和10年登山、翌11年発表）を巻頭にすえ、歌集の名も立山佐良峠で鷲を目撃した作に由来。その1首は大山町役場構内に歌碑として建立されているが、彼が湯川谷を通過した時の作中

この瀬せに立つ大岩さへに年々に押し流されて
在り処や変る

たてやまの奥おくつ谷より濁り来る水のいきほひを
岩々耐こらふ

は、立山カルデラ湯川谷のものすごい威力をまざまざと感じさせる名吟だ。）

目 次

越中立山大鳶崩れ	1 ~ 5
大災害のスケッチ集	7 ~ 16
大災害の古絵図集	17 ~ 80
図録解説	81 ~ 91
十村役と絵図の作成について	92 ~ 93
資料一覧	94
協力者一覧	95

凡 例

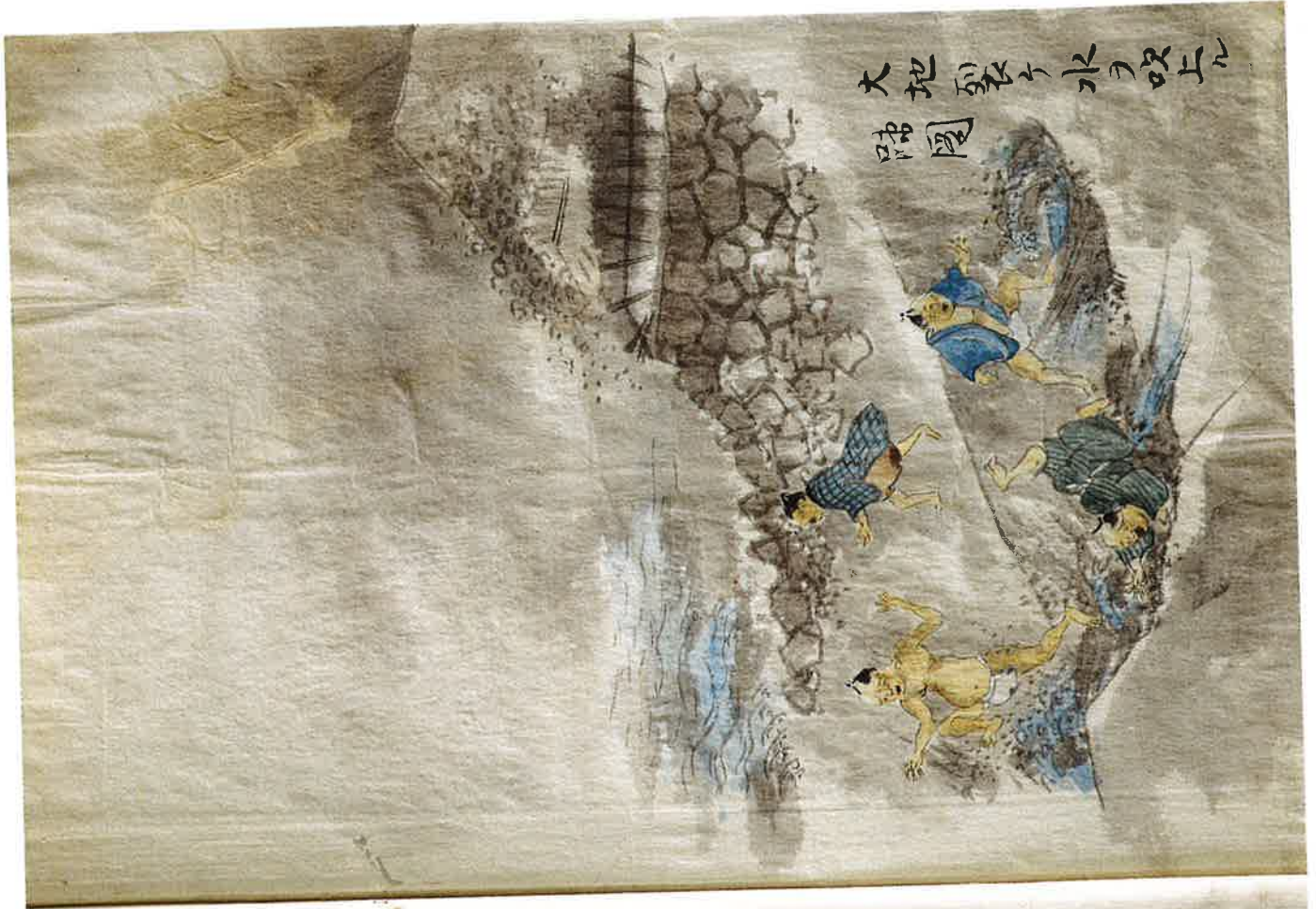
- ・この図録は、立山カルデラ砂防博物館が平成10年6月30日から8月30日まで開催する開館企画展『越中立山大鳶崩れ—古絵図は語る安政の大災害—』の解説図録である。
- ・法量の単位は全てセンチメートルである。また、縦×横で計測した。
- ・絵図5~25、26・27・29・30・34・36・37・39は、富山県[立山博物館]撮影のフィルムを借用した。
- ・解説は、①絵図名②製作年および製作者③所蔵者④概説の順にした。
なお、次の『秋季企画展地震を視る—古記録からCGまで—』(富山県[立山博物館])、『古絵図解説目録』(富山県立図書館)を参考とした。
- ・作成は、学芸課嶋本隆一が担当した。また、広瀬誠氏には、絵図の配列や図録解説に助言いただいた。

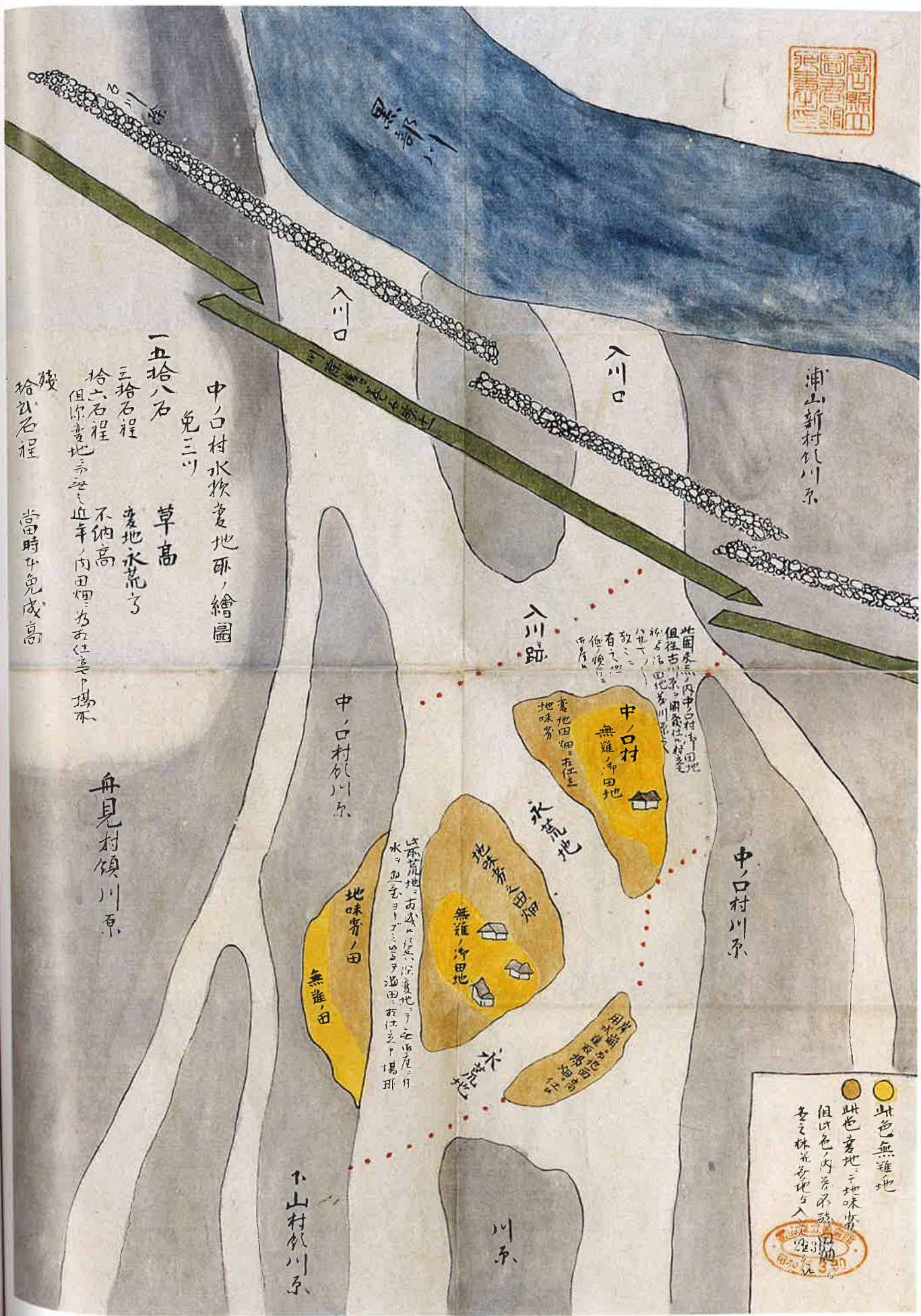
震動、砌
河水高波
十二圖



地裂所一外退
父九男女踏落先
陸圖

大地裂き水吹上
陸圖





浦山新村川系

入河口

入河口

入河口

中ノ口村川系

中ノ口村領川系

舟見村領川系

下山村領川系

川系

中ノ口村水損變地所ノ繪圖

一五拾八石
免三ツ

草高

麥地水荒了

不納高

拾六石程

但此邊地亦經近年內田畑亦有仁美ノ場不

殘

當時中免成高

中ノ口村
無雜ノ田
地味劣

無雜ノ田
地味劣

地味劣ノ田
無雜ノ田

此地荒地亦及深淺地ノ之場所
水ノ足否ヨリ田畑ノ作付ニ
場所

● 此地無雜地

● 此地荒地ノ地味劣

但此邊內亦不納高田
各之林花邊地ノ入

